

第14回日独皮膚科学会を主催して

(2024年6月26～28日)

御殿場高原 時之栖

山本 俊幸

福島県立医科大学皮膚科学講座教授

6年ぶりの開催に至るまで

6月26～28日に静岡県御殿場市で第14回日独皮膚科学会が、また引き続き29～30日に東京・浅草で名古屋市立大学によりポストコングレスが開催されました(図1)。本来であれば2020年に宮城県松島市で開催するはずでしたが、コロナの影響で数回延期となり、前回2018年のミュンヘン大会以来、6年ぶりの開催となりました。当初の予定では、松島の後のポストコングレスは愛知県の知多半島で開催される予定でしたが、東京をまたいでの移動が長距離になり大変なのと、海外の方にとって「富士

山」が魅力的ということから、静岡県での開催に変更しました。先生方が羽田(東京)―静岡―名古屋に移動すると想定していたら、その後名古屋市立大学の森田明理先生が、ポストコングレスの開催地を浅草に変更されたのを知りました。

さて、延期になっている間に、ドイツ側の会長であるThomas Ruzicka先生がミュンヘン大学を退官となり、参加者を募るのがむずかしくなってしまう、海外からどれくらい来てくれるのか蓋を開けてみるまで手探りの状態でした。初日は開始時刻の30分前になっても受付に誰もいない状態で気をもみましたが、ギリギリになって受付に列ができ、開始時間を少し遅らせて無事開催となりました。最終的に25名程度、海外から参加者を迎えることができました(図2)。

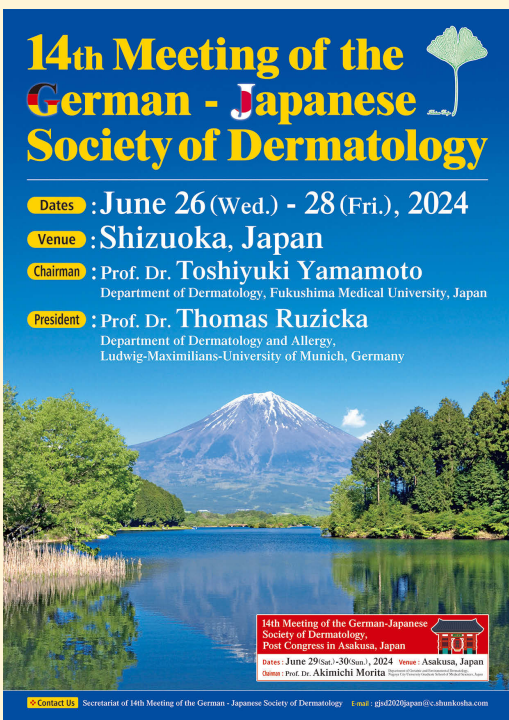


図1 大会ポスター

日独皮膚科学会の歴史

オープニングリマークスでは日独皮膚科学会の歴史(西山茂夫先生に教えていただいたように、故西尾一方先生が西部支部学術大会を主催されたときに招聘されたHornstein先生との発案で本学会が発足したが、エルランゲンでの第1回開催を待たずして西尾先生がお亡くなりになり、遺影をもって理事会に臨んだ席で第2回の会頭が西山先生に決まったことなど)を紹介しました。その後現在まで継続してきましたが(表)、この辺りを知っている人がだんだんと少なくなっていました。ドイツ側も、ずっと以前から本学会に携わっている先生が雑務を引き受けてくれていたのですが、もしかしたら



図2 大会関係者集合写真

今回で退くかもしれないという印象を受けました。私も同じで、勝岡憲生先生から直々のご指名で日独皮膚科学会を託されたような感じでこれまで来ましたが、間もなくお役御免となりそうです。また、本学会に参加してくださっていたドイツの重鎮の先生方が、だんだんご高齢になり長時間のフライトという点から今回来日できなかったのは少し残念でしたが、世代交代という感を受けました。

ウェルカムレセプションなどのおもてなし

さて、会場のホテルは、同じ敷地内にレストランや温泉も備え、一つのコミュニティのような研修施設をなしていました。ドイツ側は長旅で疲れていると思うのですが、ウェルカムレセプションの後もどこかに繰り出したいような雰囲気でした。3日目にはエクスカッションがあり富士山を見晴らせる展望台に行くはずがあいにくの雨になってしまいました。それでも初日にはホテルの部屋から富士山がみえ、多少は喜んでもらえたかもしれません。その後引き続き行われた浅草でのポストコンGRESSも盛況で、屋形船も天気にもまれて楽しんでいただけたことと思います。

苦労したのは、やはり人数が読めないことが一番困り、用意する食事の数(着席での)をどうするか悩みました。今回は昼食の鰻とフェアウェルパーティがそれにあたり、フェアウェルパーティでは教室員の席がなくなってしまいました。同じこと

は、はるか昔の奈良での学会でもあり、最終日は百年以上前に建てられた由緒ある料亭で完全着席で高級なフレンチが振舞われましたが、当日こちらの予想を超えて参加者が溢れてしまい、主催者側の席がなくなってしまったことを思い出しました。

プログラムについて

今回参加者が少ないだろうと見越してうちの教室から数多くの演題を申し込みました。教室員にとって英語で発表する機会はめったにないので、ぜひこういう機会に英語でプレゼンをしてほしいという思いからでした。準備はたいへんだったでしょうが、よい経験となってくれたことを期待しています。実際には国内の多くの施設から演題を出してもらえ、時間のやり繰りがタイトでたいへんくらいでした。

また、開催日に初めてわかったことですが、こちらで参加を把握していなかった教授の先生方が数名おられました。平日の開催なので、皆さんご予約があり、座長を依頼しても結構断られ、担い手が不足していたので、早くに知っていればお願いしたのと思いました。せっかくご参加いただきながらお役目をお願いできなかった先生方にこの場をお借りしてお詫び申し上げます。

表 日独皮膚科学会の歴史

	開催日程	会長	開催地
第1回	1987. June. 3-4	Otto P. Hornstein	Erlangen
第2回	1990. Oct. 24-25	西山 茂夫	箱根
第3回	1993. May. 14-16	Erwin J. Schöpf	Freiburg
第4回	1996. Oct. 27-29	植木 宏明	倉敷
第5回	1999. June. 3-5	Rudolf Happle	Marburg
第6回	2002. Nov. 1-3	西岡 清	奈良
第7回	2005. June. 3-5	Michael Meurer	Dresden
第8回	2007. Nov. 15-17	勝岡 憲生	横浜
第9回	2010. June. 9-12	Peter Elsner	Weimar
第10回	2012. Nov. 14-17	荒瀬 誠治	徳島
第11回	2014. June. 11-13	Alexander Enk	Heidelberg
第12回	2016. Oct. 12-14	横関 博雄	軽井沢
第13回	2018. June. 13-15	Thomas Ruzicka	Munich
第14回	2024. June. 26-28	山本 俊幸	静岡

学会運営の課題

さて、いくつかの問題点について述べると、まずは学会運営金の問題が出てきます。今回ポストコンgresと合わせて1,500万かかりました。前回の日本開催のときもそれくらいかかったと記憶しており、単刀直入にいうと、20~30名の海外ゲストをもてなすのに1,500万を費やす意味があるのか？ということになります。今回製薬企業が共催セミナーを多数開催してくれましたが、共催費と参加登録費を合わせても400万ほど不足しました。福島地方会や、県内の病院からの寄付でなんとかしのぎました。また、招待の捉え方が曖昧で、通常は参加者の中からレクチャーをお願いするのですが、今回はドイツ側が参加者を募る際に、トラベルグラントを出すから参加してくれと声をかけたようでした。また、ドイツ側でのメールのやり取りをCCで私にも回してもらいましたが、あたかも全面招待であるかのような文面が書かれており、慌てて、どこまで学会負担できるかということを知ってもらおうよう、メールを出しました。ただ、せっかく遠路はるばる来てくださる方々に精一杯のおもてなしをしたいという日本的な感覚で、キーノート

レクチャーをする先生にも宿泊を用意するようになってしまい、かなり大盤振る舞いでした。

もともと日独皮膚学会はドイツに縁の深い先生方(主に留学経験者)を中心に開催されてきましたが、最近はいよいよオープンになりました。以前はお互い招待し合っていたので、たとえば日本人会員は、ドイツで開催時には宿泊を用意してもらえというメリットがありました。しかし前回のミュンヘンから諸般の事情でそれがなくなり、そうすると会員であるメリットがなくなってしまい、会費を納めている意味が薄れてしまうといった状況になってきてしまっています。会員と非会員の差がなくならないよう、発表資格(もしかしたらこれまであまり厳格ではなかった)を設けて、そのときだけでも会員になってもらうようにしようかと考えています。また、学会が開催されない年にも年会費は納入になるので、少し会費を下げることも検討していこうかと考えています。

日独皮膚科学会のこれから

次回の本会は、2年後にマールブルグで開催されます。いま、円安で航空運賃が非常に高騰しているので、航空費、登録料、宿泊費など個人で全額負担だと厳しいです。ドイツ側からトラベルグラントを貰えるのはたかだか10名ですが、日本皮膚科学会も近年トラベルグラントを設けて支援してくれているので、次回参加される若い先生方にはぜひそういう制度を利用していただきたいと思います。

本学会は、3年に一度の開催から始まり、途中で2年に一度の開催となりました。2年というのは、あっという間に過ぎるので、3年に一度に戻してはどうかと理事会で提案しましたが、(意外に?)2年に一度を希望する先生が多かったです。日独皮膚科学会は、半分観光を兼ねた学会でいまでも古きよき学会と捉えていただけているかわかりませんが、参加したいと思う人が少しでも増えてくれるような魅力的な会として今後も継続してくれることを願っています。